

松下幸之助記念財団 研究助成  
研究報告

【氏名】岡本 年正

【所属】(助成決定時)

東京大学 大学院総合文化研究科 超域文化科学専攻 文化人類学分野 博士課程

【研究題目】

市場経済における文化の「真正性」をめぐる民族誌的研究  
—ペルー・クスコの Q'ero と祖先伝来文化集会の事例研究—

【研究の目的】

本研究は、ペルー共和国クスコ県のクランデーロ(シャーマン/民間医療者)として有名であり、「インカの伝統を受け継ぐ人々」というレッテルの貼られているケロ(Q'ero)村の人々が、現代のグローバリゼーションの影響を受けつつ、クスコ社会とそこでの市場経済を彼らの文化を通していかに生きているのか民族誌的に描き出していくものである。ケロの人々はアンデスの民間信仰の実践者/識者であり、クスコにおける伝統的儀礼の担い手でもある。その彼らを市場経済に繋げるアクターとして観光業者、観光客、クランデーロを訪ねる人々が存在している。彼らが一堂に会する機会となる祖先伝来文化集会(2011年11月にクスコで開催)でのケロの人々を含めたこれらアクターの相互作用を分析することで、クスコ社会の内と外の違いというだけでなく、内部そのものでの文化や伝統に対する認識の複層性や意味を明らかにすることを本研究の目的とする。

【研究の内容・方法】

本研究は、主に参与観察と聞き取りによる現地調査に基づいてなされた。ケロの人々を中心とし、彼らと市場経済的な相互作用関係にある人々(クランデーロとしてのケロを訪ねる人々、観光客、観光業者)に対し聞き取りを行い、彼らの接触場面として、特に祖先伝来文化集会での参与観察を行った。

以下、事例となった祖先伝来文化集会での参与観察とそこでの聞き取り調査、また集会後に集会に参加していた現地の人々への聞き取りを要点ごとに記す。

第三回祖先伝来文化集会は11月11日を中心日とし、11月7日から11月20日までの観光ツアーの一環として開催された。ツアー参加者の多くは第一回集会(ウルグアイ東方共和国で開催)にも参加していた。また、ケロやクスコの文化や伝統といったことに精通している人はいなかった。彼らはクスコの民間信仰を尊重しつつも、その民間信仰そのものを知り理解するというよりは、より抽象的な部分での繋がりを強調する。至る所で時間があれば常に瞑想をし、そして「エネルギーの補充」、「宇宙を感じる」と発言するツアー客にそれを見ることが出来る。そのようなツアー客に対し、ケロの人々は、集会とその後のツアーの一部に帯同する中で儀礼を行う一方、携えた民芸品の販売も行っていた。彼らにとってカネを稼ぐ場ではあったが、かといって儀礼をおざなりすることはない。とはいえ集会に対する彼らの理解は、ツアー参加者が口にする意味を理解しているわけではなく、彼ら自身が納得できるような解釈をしていた。この解釈は先述したツアー客の抽象的な理解と共通する部分が多い。この点において、観光業者はケロの真正性を前面に押し出そうとしていたが、彼らが考える像とツアー客が考える像にはズレが存在することになる。ツアーの外側に位置するも、集会にはクスコの人々も同席していた。集会当日と後日、聞き取りを行った。彼らは口々に「彼らのやり方で、彼らのこと(儀式)をしている」や「一種のフュージョン(fusión)だ」と言うも、価値判断をしていない。むしろケロの存在を認め、「もし彼ら(ケロ)が彼らの意思(voluntad)で来ていたら素晴らしい」とし、集会に重要性を見出そうともしていた。

## 【結論・考察】

集会そのものはケロがいることで、クスコにおける伝統ある儀礼としての様相を呈しつつも、クスコ外のアクター（ツアー参加者やその他のシャーマン）との融合がなされ、一見、新しいものとして人々を惹きつけた。ケロが文化的アイコンであることは間違いないが、彼らをより抽象的な存在として利用した観光業者は、文化的資源として彼らを商品として売ること成功している。これは、彼らが何を売るかというよりは、客側が何を欲しているかという需給の関係が成立している結果でもある。売られる側のケロは、自らの消費としての価値を理解しつつも、観光業者やツアー参加者との権力関係に晒されている。彼らの存在なしではツアーも儀礼も成立しないが、彼らにとっては客と、その客と彼らをつなぐパイプ役が必要であり、そして彼らに支払い（ここでは物品販売や個別の儀礼の場の提供）がなされる点において、常に下に位置付けられている。しかしこれを利益とするケロにとっては、この権力関係は維持されなくてはならない。認識されるイメージは複層的で、合致することがなくてもイメージの売買は可能であり、そして売られる対象にとっては権力関係が市場経済の中に維持されるべきものとして位置付けられていることが明確になった。